

長岡京市史

ふるさと  
ファイル

展示コーナーだより  
第5号

平成14年6月  
長岡京市立図書館

# 小畑川の水害と治水

展示期間：6月4日～7月7日



## くらしを結ぶ小畑川の流れ

老ノ坂付近（京都市西京区）に源を發し、大山崎の下植野付近で桂川に合流。全長は約15キロメートルで、途中で善峰川・風呂川・犬川・小泉川が流れ込み、流域の村々のくらしを結んでいました。

昭和30年代までは、川底が高くて湯水時には一滴の水もなくなるが、いったん大雨が降るとどこかで堤防が切れる暴れ川で有名でした。

昭和42年から始められた大改修で、川底が掘り下げられ、高い堤が築かれて、その様相が大きく変わりました。大改修前の小畑川の水害のようすと、その対策に取り組んだ人々の営みを紹介しましょう。

### 小畑川豆知識

江戸時代、桂川・宇治川・木津川の合流点は、現在より北にあり、小畑川の川口と近接していました。

明治になって木津川と宇治川が下流に付け替えられて、天王山付近で合流する今のような流路になったのです。



「山城名勝志」乙訓郡図から

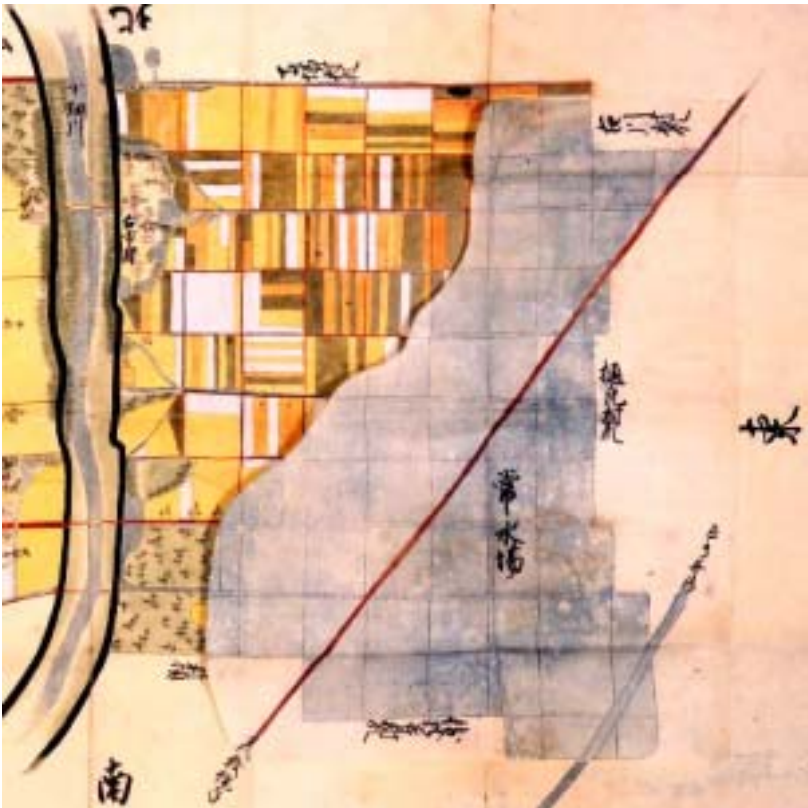


## 「常水場」の仕掛け絵図

小畑川と淀川が合流する付近では、堤の決壊による水害のほかにもう一つ、厄介な問題がありました。上流の村々から流れてくる排水が集まり、この付近であふれてしまうのです。

小畑川の左岸、古市・神足・勝竜寺の東側の田地は土地が低いので、とくに水がつきやすく、「常水場」とよばれたところがありました。古市村にはどこが水つきとなるのかを貼り紙で示した絵図が残っており、その悩みの深さをよく伝えています。

乙訓郡の治水が集約されるともいえるこの場所は、古くから流域の村々が組合をつくり、連携して維持・管理を行っていました。



古市村・神足村絵図（江戸時代 古市区有文書）



## 水の自動ドア

明治 37 年から翌年にかけて、新神足村は、字松ノ木橋（大山崎村）の「悪水吐樋あくすいはけひこう欄」の改築に取り組みました。その設計書には「構造八煉瓦石造混製、扉八片前ニシテ水ノ昇降ニ随ヒ、開閉自在ナラシム」とあり、上流からの水を排水する場合は扉が開き、下流の水があふれて逆流してきたときは自動的に扉が閉まるしくみとなっていました。

下の写真は、明治 26 年に建設された馬ノ池川の水門です。ここは洛西浄化センターとなり今はありませんが、松ノ木橋の水門と同様の構造をしていました。後ろにみえるのはできたばかりの新幹線（昭和 39 年開通）です。このころの「常水場」のようすと、明治期の治水技術をものがたる貴重な写真です。



## 展示資料

### 古市村・神足村絵図（古市区有文書）

江戸時代の古市村と神足村のようすが一目でわかる絵図です。よくみると、小畑川の下をくぐる「伏越し（ふせこし）」で農業用水を取水しているようすも細かく描かれています。長岡京市史『資料編三』に、この絵図の全体写真と解説図が載っており、『本文編二』に江戸時代の悪水抜きに関する乙訓の村々の動きが紹介されていますので、参考にしてください。

### 字松ノ木橋樋開設計書（長谷川太一家文書）

新神足村の村会議員に配られた文書で、この設計書のほか予算書や決算書もあり、字松ノ木橋の水門建設のようすがよくわかります。

## ふるさとワーク

古文書の輪読会りんどくかいを行っています。文字どおりみんなで輪になって、順番に声を出しながら読んでいきます。「こんなくずし字、ほんとに読めるの？」と心配な方も大丈夫。「習うより慣れろ」で、図書館の担当職員と一緒に読み合わせていきます。江戸時代の庶民の文字とことばを体感してみませんか。

6月29日（土）のふるさとワークは、午前中の輪読会の後、午後から小畑川を中心にした野外見学を行います。展示とあわせて「小畑川の今」を見てみましょう。

【コース】図書館（午後1時出発） 一里塚 西国街道 勝龍寺城公園  
落合橋 神足神社（午後4時解散予定、雨天決行）

参加を希望される方は、市史資料担当（954-3557）までお申込み下さい。